様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２０ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０９８５

研究課題名（和文）ミャンマーにおける「民族」の境界と「宗教」の境界の関係性に関する人類学的研究

研究課題名（英文）Anthropological Study of Relations between "Ethnic" Boundary and "Religious" Boundary in Myanmar

研究代表者
高谷　紀夫（Takatani, Michio）

広島大学・総合科学研究科・教授

研究者番号：７０１５４７８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,900,000円、（間接経費）　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ミャンマーにおける「民族」の境界と「宗教」の境界との相関関係に関する考察である。19世紀の英領植民地時代に活躍したキリスト教宣教師ジャドソンとクッシングは、それぞれ辞典編纂に努力しただけではなく、仏教とキリスト教の対話、さらにはビルマ文化、シャン文化の知識との交流に貢献してきた。他方、イスラム教の場合は、マジョリティであるビルマ族仏教徒とは、民族的にも宗教的にも境界が明確であり、対話と交流の実績は歴史的に希薄で「対立」の背景になっているように思われる。今後も、ミャンマーにおける多様性に関して、知識の構築、再構築の観点から考察を深化しなければならないのである。

研究成果の概要（英文）：This research project is an attempt to present an anthropological analysis of relations between "ethnic" boundary and "religious" boundary in Myanmar (Burma). Dr. Judson and Dr. Cushing were Baptist missionaries who were famous for compiling and publishing a Burmese-Dictionary/a Shan-English dictionary. They not only tried to contribute to bridge between Buddhism and Christianity but also communicate with Bamar/Shan (Tai) cultural heritage and knowledge. That's why there appears no remarkable conflict with Bamar Buddhists as majority. But in case of Muslims, both "ethnic" difference and "religious" difference from Bamar Buddhists sometimes seem to be a factor of conflict. There were no communication of cultural heritage and knowledge between them. We have to research about diversity in Myanmar from view point of "ethnic" and "religious" construction and reconstruction of knowledge from now on, too.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：ミャンマー　人類学　民族　宗教　境界

１．研究開始当初の背景

多民族国家ミャンマー（旧ビルマ）連邦共和国は，文化人類学及び隣接科学において未開拓のフィールドであり，その実像は，ビルマ族が約 67%，仏教徒が 90%近くを占める多民族・多宗教状況が背景となって，非ビルマ族，非仏教徒にとって，その境界をめぐる相克が問題化する蓋然性を有している。従って，一次資料に基づく境界をめぐる議論と研究成果が，学術的に注目されてきた。

本研究の代表者は，1983 年以来，通算約 4 年間の現地滞在経験を有し，現地語の運用能力を活用して現地研究者と連携しながら蒐集した資料に基づく研究成果を，現地の国際会議及び日本国内で発表してきた。その研究の基本的立場は，19 世紀後半の英領植民地化前後から，今日の政府による宗教政策・文化政策の実施に至る多民族共生の状況に関して，主に民族間関係の変遷及び独立前後から始動する国家統合と国民文化形成の過程から考察することにあり，特にその過程で生成する「民族」のマジョリティとマイノリティ双方の自民族意識形成及びその表象の相互作用に着目してきた。

本研究で主目的としているのは，「民族」の境界と「宗教」の境界との相関関係に関する考察である。その着想の契機と展開は，本研究の代表者が，文部省在外研究員制度を活用して，1996-1997 年に，軍事政権下では最初となる長期外国人客員研究員をしていた唯一の国史編纂研究機関であるミャンマー大学歴史研究センター及びその上部機関である歴史委員会の研究者との学術交流の開始と継続にある。それ以降，科学研究費補助金を活用して従事してきたミャンマーの「国民文化」「エスニシティと民族間関係」「文化行政と文化遺産」「教育行政と民族教育」に関する人類学的研究の蓄積を基盤に，本研究はさらなる発展を期するものである。

民族論は，人類学的研究の領域において，重要な課題のひとつとして継続的に評価され，リーチ (E.R.Leach)の社会誌的動態論，バルト(Fredrik Barth)の境界論などを嚆矢として，「民族」は研究対象となる人々の社会単位としてよりも，認識上の範疇として解釈される傾向が認められ，その実体化の脈絡が問われてきた。また，この課題に関しては，民族誌として記述されることで，人類学者自身が実体化に関与しているという自省を促しながら，その議論のさらなる活性化が求められてきた。

ミャンマーの文化的社会的脈絡において，「民族」の境界と「宗教」の境界との関係性については未考察のままである。なぜなら，民族的マジョリティであるビルマ族，代表的な同マイノリティであるシャン族は，その約 90%が仏教徒で，比較的キリスト教徒の多い主に山岳地帯に居住する少数民族と，無批判に対立的に理解されてきたからである。ビルマ族にもシャン族にもキリスト教徒は存在する。シャン族とならぶ有力な民族的マイノリティであるカイン（カレン）族についても，政府寄りの仏教徒，反政府寄りのキリスト教徒として，二つの境界が原理的に異なりながら，ステレオ・タイプ的に，重ね合わせて解釈され記述されてきたのである。本研究は，それらの点を切り口にして，「民族」に関する新たな解釈の枠組みの提示を目標としている。

なお，本研究代表者は，ミャンマーの民族学研究の拠点であるヤンゴン大学人類学科から依頼を受け，客員教授的立場（2012 年に正式に客員教授となった）から同学科でセミナー等を提供してきた経験があり，現地高等教育機関との接点を有している。さらにまたASEAN（東南アジア諸国連合）内各国に設置された共同利用機関のひとつ，SEAMEO-CHAT（東南アジア教育省組織歴史伝統地域センター）との学術交流も継続している。本研究においては，上記の現地研究機関との学術的ネットワークを活用して，同所属の研究者と共同で，民族論，境界論におけるマジョリティとマイノリティの相互作用とその表象に関して，一次資料を駆使して調査研究を遂行する計画である。

２．研究の目的

本研究は，代表者が 1980 年代より継続している多民族国家ミャンマー（旧ビルマ）とその周辺における文化と社会に関する人類学的研究の一部を成すものであり，その主目的は，既存の民族論の批判的評価を基盤に，ミャンマーの政治的脈絡において，「民族」の境界と「宗教」の境界との関係性について現地資料を活用して考察を加えることである。ミャンマーにおいて「民族」の境界は，対立するものとして範疇化される構造を有する一方で，「宗教」の境界と無批判的に重ね合わせて解釈され，マジョリティであるビルマ族仏教徒が主な研究対象とされてきた。本研究は，「民族」と「宗教」の境界論からマイノリティを生成する社会構造に迫る人類学的考察である。

３．研究の方法

本研究計画においては，主に次の三つを，研究方法として採用した。

(1)本研究の代表者が，過去，現地研究者との間で構築し維持してきた学術的ネットワークを活用して，学術協力関係を深化させながら調査研究を実施し，一次資料の蒐集を行う。具体的な協力パートナーは，現地ミャンマー文化省歴史調査局，ヤンゴン大学及びヤダナボン大学人類学科，マイノリティ文化の保護保存活動を実施しているシャン文芸文化委員会等である。

具体的には，文化省歴史調査局チョー・ニェイン (Kyaw Nyein)氏，及び同所属研究員等の専門的知識を最大限活用して，助言を仰ぐと同時に，学術交流と調査研究データの共

有を行う。また，近年，少数民族研究を推進しているヤンゴン大学，及びマンダレー・ヤダナボン大学人類学科との共同研究による学術交流を，同教員であるティダー・トゥエ・ウィン (Thidar Htwe Win)氏，タン・パレー (Than Pale)氏等を海外共同研究者として行う。またシャン族に関しては，上述したシャン文芸文化委員会に加え，ネットワークを構築済みのシャン族キリスト教徒団体へのインタビューも実施する。
(2)国内では，研究課題に関係する資料を所蔵する京都大学東南アジア研究所，国立民族学博物館，東京大学大学院総合文化研究科，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所等を訪問し，資料蒐集と所属研究者との学術交流を行う。
(3)蒐集した一次資料に基づき，分析を加え，その研究成果を現地研究機関で発表し，その還元を行うとともに，国内研究機関のセミナー等で発表し，議論を深化させる。

本研究は，ミャンマーにおける宗教実践と「民族」の境界との相互作用に関する本格的な学術研究であり，多民族国家研究において，人類学的に重要な意義がある。また本研究の代表者は，民族学研究の中心的部局であるヤンゴン大学人類学科客員教授の立場にあり，その内部から検証する研究方法は，本研究計画の学術面における独創性である。また，すでにマイノリティであるビルマ族キリスト教徒，シャン族キリスト教徒団体とのネットワークもあり，仏教信仰に留まらない全体的な視点からミャンマーの信仰体系にアプローチする手法も，独創的なものである。

４．研究成果

主な研究成果は次の三点である。

第一に，仏教徒が宗教的マジョリティを占めるミャンマーにおいて，各民族，特にビルマ族，シャン族の「知識」の構築にキリスト教布教が関係していることを確認できたことである。具体的には，ビルマ語英語辞典，シャン語ビルマ語辞典の編纂は，西洋文化との交渉による成果であり，結果的に両民族の自画像の輪郭構築に寄与したのである。なお本研究代表者は，この研究成果の一部を，2012 年 12 月に東部シャン州ケントゥンにて開催された全国シャン民族正月祝賀会において，唯一の日本人研究者として招待報告を行い，注目された。外国メディアからも取材を受けた。平行してヤンゴン大学客員教授として人類学科の集中講義においても同研究成果を還元し，議論を深化させた。

第二に，ビルマ族同様に，仏教徒が宗教的マジョリティを占めるシャン族内において，同キリスト教徒が，孤立していない状況を明らかにできたことである。シャン新年が，「宗教」の境界を超えて毎年祝賀され，2013 年暮れのバプティスト布教開始 200 周年祝賀会が，ヤンゴンにて「民族」の境界を超えて，無事挙行されたことなどにも表象されている。その実践を支えているのが，西洋文化，特にキリスト教の「知」との接触を契機とする，「宗教」の境界を超える包括的な自民族「知識」構築の基盤と，その文脈において仏教徒が宗教的マジョリティであるというシャン族の特異性であると考えられる。

第三に，近年，抗争状況が国内外のメディアで報道されているイスラム教徒と仏教徒との対立の構図は，「宗教」の境界が実体化あるいは問題化したこともさることながら，「知識」構築の接点が双方に認められないことが要因のひとつとして指摘できたことである。即ち，「民族」の境界と「宗教」の境界の関係性の考察において，ミャンマーの事例は，「知識」構築の観点から多くの分析の発展性を示しているのである。さらなる議論の深化は，今後の課題としたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2 件）

1.高谷紀夫，シャン文化の行方，『「民族」・宗教・文化化−ミャンマー，カンボジアを事例に−，1 巻，査読無，2014，pp13-35
2.高谷紀夫，ミャンマーにおける「宗教」の知をめぐって，1 巻，『「民族」・宗教・文化化−ミャンマー，カンボジアを事例に−，査読無，2014，pp38-44

〔学会発表〕（計　5 件）

1.高谷紀夫，ミャンマーの文化政策，2014 年度慶應義塾大学東アジア研究所講座「アジアの文化遺産−過去・現在・未来−」，2014 年 4 月 30 日，慶應義塾大学三田キャンパス
2.高谷紀夫，ミャンマーの「政治的観光」その後・・・，観光学術学会主催第 1 回研究集会（立命館大学人文科学研究所共催），2014 年 2 月 23 日，立命館大学衣笠キャンパス
3.高谷紀夫，シャン文化の行方，平成 25 年度国立民族学博物館共同研究会「「統制」と公共性の人類学的研究」，2013 年 11 月 10 日，東京外国語大学本郷サテライトキャンパス
4.TAKATANI Michio, An Anthropological Study of Dr. J.N.Cushing's Dictionary,13 Dec, 2012, Kengtung, Eastern Shan State, Republic of the Union of Myanmar
5.TAKATANI Michio, Work and Life of U Min Naing, B.A.,3 Jun 2011, Busan, Republic of Korea

〔図書〕（計　2 件）

1.田村克己・松田正彦（編），飯國有佳子，池田一人，伊野憲治，井上さゆり，岡野賢二，岡本郁子，奥平龍二，加藤昌彦，久保忠行，熊田直子，藏本龍介，小島敬裕，高谷紀夫，高橋昭雄，高橋ゆり，谷祐可子，土佐桂子，土橋泰子，中西嘉宏，ナンミャーケーカイン，

根本敬，原田正美，兵頭千夏，水野明日香，南田みどり，藪司郎，渡辺佳成他，明石書店，ミャンマーを知るための 60 章（高谷紀夫，国家と民族−多民族国家の構図と行方-），2013 年，388(255-253)頁
2.高谷紀夫・沼崎一郎（編），東北大学出版会，つながりの文化人類学，2012 年，340 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
高谷　紀夫　（TAKATANI MICHIO）
広島大学・大学院総合科学研究科・教授
研究者番号：７０１５４７８９